



—竹中銅器では今年、長崎の平和祈念像の修復を手掛けました。どのような思いでしたか。

受注できたのは、高岡の技術が高く評価されたからだと受け止めています。19年前にも修復を担当したので、引き続き、任せてもらえたことほうれしいですね。国内外で知名度が高い像なので実績をアピールし、ほかの受注にもつなげたいです。

像のあせた色を塗り直したんですが、これには職人技を使っています。時間をおいて異なる2色を塗り重ね、乾く前に後から塗った色を拭き取るんです。これで自然な風合いが表現できるんです。

仕事に喜び持って

「こち亀」の両さん

—キャラクター銅像の制作でも有名です。一番思い出に残っている像は何ですか。

漫画「こち亀」の両津勘吉ですね。ギャグ漫画だから2次元でかつデフォルメされていて、漫画の通り作ると口が大きすぎてカバみたいになっちゃう。制作現場に足を運び、どの方向から見てもイメージを壊さない立体に仕

上げるよう修正を重ねました。

—両さんの銅像は東京都葛飾区で展示した時、一部が壊されたんです。青銅製で鋼鉄より弱いけど、普通は人の力で折ったりできないんですけどね。修理では、また壊されないうよう、内部にステンレスを入れて強化しました。

明日は進歩する

—社員にはどのような心掛

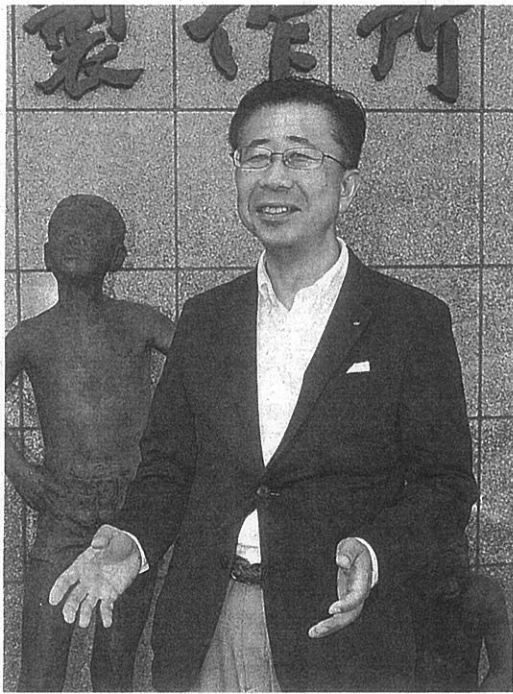
けを伝えていきますか。

「今日より明日は進歩しよう」と言っています。ある人気がラーメン店主の言葉が印象に残っているからです。

その店主は客から「昔ながらの味を続けて繁盛していますね」と言われ、「客は舌が肥えてくるので、毎日少しでもおいしいラーメンを作ろうと挑戦を続けている」と答えたそうです。

うちも今は技術が評価され、平和祈念像やキャラクター銅像を手掛けましたが、満足して進歩する努力を止めると、将来は「物足りない」と思われるかもしれません。

—富山新聞文化センターの



銅器業界への思いを語る竹中社長

—高岡市内の店舗

寄付講座「経営学の現場」でも講師を務めています。若者に何を伝えたいですか。

仕事に喜びを持ってほしいということです。ドラミッド建造に例えると、大きな石を運ぶ人に「何をしているのか」と聞くと、3通りの返答があるでしょう。一つ目は「大きな石を運んで苦しい」、二つ目は「王様の大きな墓を造っている」。そして三つ目は「人類の歴史に残る偉大な建造物を造っている」。三つ目のように考えれば前向きに取り組めるでしょう。同じ仕事でも意義や喜びを見いだしていけば、人生が豊かになるのではないのでしょうか。

たけなか・のぶゆき 高岡市出身。56歳。高岡高、早大文学部卒。漆器の問屋で修行を積んだ後、1989年に入社し、2012年8月から社長。竹中製作所は従業員60人、売上高は約40億円。竹中銅器は従業員20人、売上高は約7億円。